

対人心理距離尺度作成の過程及び 対人心理距離に関する一仮説の呈示

——「原子価」の観点からの検討——

別 所 崇*

The Development Process of a Measurement Tool for Interpersonal Psychological Space and a Hypothesis: Thinking from the point of view from "valency"

Takashi BESSHO

要 旨

本研究は、個人の人とのつながり方が、人との距離の取り方にどのように反映されるかを、Wilfred, Bion (1961) の原子価の概念に基づき検証するものである。

Hall (1966) は、我々が人と接する時に、知らず知らずのうちに相手や状況に合わせた距離をとっているとし、それを密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離という4つの距離帯に分類した。この物理的距離に対して、最近様々な心理学の分野で、心理的距離というものに対する研究が行われている。例えば、山根 (1995) 山口 (2004) など。しかし、これまでの研究では個人の特性や親密さの観点から心理的距離を捉えることが多かったように思える。

そこで、本研究では距離というからには、自分と相手という二者を考える必要があるとして、個人の人とのつながり方からみた心理的距離を、Bion (1961) の唱えた原子価の概念を利用し、さらにそれを発展させたHafsi (1997, 2006) の理論をもとに、ある空間における二者間の打ち合わせ場面を想定し、原子価により自分と相手の座席選択行動に、どのような違いが見られるかを検証するための、尺度の作成を試みた。

I. 問 題

1. 問題

人間が他者と接するときには、その人やその場の状況によって、知らず知らずのうちに、他者との距離をとっている。Hall (1966) は、このような人間同士の間の距離感について、プロクセミクス (Proxemics) という学問を提唱した。そこでの主要なテーマの1つは、人と人とが社会的接触を行うときに、その間にとられる物理的距離の大きさであった。Hallはアメリカ合衆国北東岸に住む健康な成人の行動を観察した結果、人間における相互の隔たりを次のように8つの距離帯に分類した。①密接距離 (Intimate distance) a. 近接相 (0~15cm) : 愛撫、格闘、慰め、

平成18年9月29日受理 *社会学研究科

保護の距離。b. 遠方相 (15~45cm) : 手で相手の手に触れたり握ったりすることのできる距離。
 ②個体距離 (Personal distance) a. 近接相 (45~75cm) : どちらか一方が自分の手足で相手を抱いたり、つかまえたりすることができる距離。b. 遠方相 (75~120cm) : 両方が腕を伸ばせば指が触れ合う距離。③社会距離 (Social distance) a. 近接相 (120~210cm) : 個人的でない用件が行われる距離。b. 遠方相 (210~360cm) : 人をお互いに遮蔽することのできる距離。④公衆距離 (Public distance) a. 近接相 (360~750cm) : 形式的な文体で話す距離。b. 遠方相 (750~cm) : 講演のような一方的な働きかけにおける距離。

この人間の持つ距離感は、他者が近づくと不快感をもよおす個人空間 (Personal Space) の問題とも結びつく。Sommer (1969) はその中心は人間の体であり、パーソナル・スペースは目に見えぬ体の延長であるとした。また、Little (1965) はパーソナル・スペースは、個人を直接取り囲んでいる領域で、個人の対人関係はほとんどその場所で行われるとした。つまり、これらの距離によって表されるのは、個人の持つ物理的な空間である。

対人行動学研究会 (1986) によると、このような対人距離は、個体要因、性別、場面、文化の違いにより影響を受け、相手への親和欲求が高く、不安・緊張などが低いと、距離は縮み、男性よりも女性の方が、内向的なものよりも外向的なものの方が、距離は短い傾向があるとされる。例えば、Hall (1966) は上述した距離帯についてロシア人とかなりの社会的交流を持ったアメリカ人の報告として、アメリカの密接距離に特有な徴候のいくつかを、ロシアでは社会距離の中に見られることを挙げている。さらに、青野 (1979) は一般に男子ペアは女子ペアよりも大きい対人距離をとる傾向があるとし、吉田・堀 (1989) は裸眼・サングラス・ミラーグラスを使った実験を行い、視覚遮断の程度が強まるに従い、対人距離が短くなることを明らかにした。また、大森・宮田 (1998) は面接場面において、対人距離が瞬目に与える影響を調べ、相手との距離が近すぎることによる緊張や不安の高まり、不快感が平均瞬目率に影響することを示した。

一方、対人距離の取り方は、一方向についてのみ成立するものではなく、一定の広がりを持っており、相手との親密度に応じて、伸縮自在に動くものであるとされる。近年、対人距離を研究する領域で、この親密度について心理的距離 (Psychological distance) と呼び、いくつかの研究が行われている。例えば山根 (1995) は、その心理学での使われ方として、一つは物理的距離に対応する心理的距離感、もう一つは「対象との親密感としての馴染み・疎遠感覚としての使われ方」がされているとしている。また、教師と生徒との心理的距離について研究を重ねてきた山口 (2004) は、心理的距離を「ある人とある人との間に存在する二者間の親密度・親和性・親近感の度合いや程度を表す概念」と定義している。さらに天貝 (1996) は、友人関係における心理的距離について考察し、心理的距離は他者との親密さの程度 (親密性) と他者との融合の程度 (依存性) の両面から成り立つとしている。

山根 (2005) は心理的距離の一般モデルが構成されたならば、そこに個人差 (性格傾向など) があるかどうかを問題にする必要があると指摘し、クレッチマーの気質類型論と心理的距離との関連を探った。クレッチマーは臨床上の経験を通じて、精神病と体型の関係が、健常者における体型と気質の関係にも適用されると考え、躁鬱気質、分裂気質、てんかん気質という3つの気質

類型を提示した。のちに、安永（1992）はクレッチマーのてんかん気質に代わる第三の気質として、中心気質を提案した。山根はこのクレッチマーと安永の類型を元にした気質別の距離感について、躁鬱気質を持つ人は、他者に一体感を期待するために、それを可能にする世界との近さが、他者と出会うまでに得られているので、心理的距離は近いと言える。次に、分裂気質を持つ人は、自己と世界の間には克服できない距離があり、世界は世界であり、自己も自己でしかない、という特徴を持つので、心理的距離感はずいぶん遠いと言える。最後に中心気質を持つ人は、世界との密着性、自己と世界間の距離のなさが特徴であり、よって世界との距離が最も短いと言える。と、述べている。山根は、この気質間での心理的距離に注目し、「その距離感、他者への接近しやすさ（接近速度）をも示しており、そこで気質の異なる者間に関係に特徴がでてくる。」と述べ、各気質の理想の心理的距離の在り方に触れている。

ところで、気質という言葉は、心理学辞典によれば、「個人の示す情動反応の特徴」と説明されている。したがって、ここで述べられている、気質と心理的距離との関係は、個人の特性という観点からみた距離感としてとらえることができるであろう。しかしながら、二者間の距離というからには、当事者と相手が必要である。ここでの個人の特性、つまり個人がどうであるかという見方では、もう一方の相手を考慮しているとは言えない。そこで、本稿では個人の他者との関係のあり方、つまり他者とつながるために個人が持つ特性からみた心理的距離を、Bion（1961）とHafsi（1997, 2006）の原子価の理論を使って明らかにしてみたい。

2. 原子価の理論

Bion（1961）は、対人関係あるいは個人の他者とのつながり方を説明するのに、化学の用語である「原子価（Valency）」を用い説明しようとした。そして、Bionは原子価を「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する個人の能力」であり、「基底的理想（basic assumption）を創り出したり、行動化したりするためにグループと結合していくための個人の準備状態」と定義している。Bionは、あらゆるグループ活動には、2つの心的側面があるとした。1つは、意識的で現実的側面を持つ「作動グループ（work group）」、もう1つは無意識的で幻想中心の「基底的理想グループ（basic assumption group）」である。基底的理想グループにおいて、グループメンバーに共有される幻想が基底的理想である。さらにHafsi（2006b）は、Bionの定義を統合しながら、原子価を「グループメンバーだけではなく、全ての対人関係に対する個人の反応パターン」と再定義した。また、Bionは原子価の類型として、「依存」、「闘争・逃避」、「つがい」の3つの種類があることを示唆した。しかしHafsi（1997）は、Bionが同一であると分類した「闘争・逃避」原子価を、共通性はあるものの、対人関係の持ち方やグループ状況に対する反応などから、相違がみられるとし、「闘争」と「逃避」とに分類した。よって本稿ではHafsiの分類にならない、原子価の類型を「依存」、「闘争」、「逃避」、「つがい」の4つとして論を進める。

以下は、各原子価の主な特徴である。

依存（Dependency）：低い自己評価と他者の過剰評価、相互作用的依存、先輩・後輩や上司・

部下といった縦的人間関係を好む、など。つまり、様々な面で他者が自分より優れていると無意識的・意識的に考えるので、他者とつながるためには、その人に頼っていくしかないように振る舞う傾向がある。

闘争 (Fight) : 常に敵を意識する強い競争心、攻撃性、高い自己評価、自己主張、など。したがって、議論や討論を好み、競争したり批判したりするために、他者との接触を求めるかのようにも見える。そのため、他者との関係やグループ活動下において、グループの凝集性を重視し、リーダーシップを発揮する傾向を持つ。

逃避 (Flight) : 他者に対する不信感が強く、他者との競争や葛藤を避けるため、一定の距離感を保とうとする傾向がある。そのため、リーダーシップや責任のある地位を避ける傾向が強い。また、人に依存することは、迷惑であると感じるので、一見して内向的かつ冷たそうに見える。

つがい (Pairing) : 他者との親密な対人関係を好み、大人数より少人数のグループを好む。そして、異性に対しては積極的に振る舞う傾向が見られる。グループ活動においては、平等主義に象徴されるように横的關係を重視する。また、未来志向の楽観主義者が多い傾向にある。

このように、原子価には4つの類型が存在しているが、Hafsi (2006b)によれば、個人にはある1つの原子価だけではなく、水準は異なるが、全ての原子価が備わっている。さらに、個人には1つの主要な原子価「活動的原子価 (active valency)」があり、他の3つは「補助的原子価 (auxiliary valency)」である。この活動的原子価は人が対人関係において最も頻繁に示す原子価で、個人はこの原子価に沿った行動を行う。また、何らかの理由で活動的原子価が示せないときに用いられるのが、補助的原子価である。これには、「適応機能」と「補助的機能」の2つがあると考えられ、補助的原子価によって、人は多くの異なる対人関係に反応したり、適応することができる。また補助的機能によって、人は自分の活動的原子価に基づいて振る舞いながら、状況に応じて一定の補助的原子価の側面を示し、対象との関係を維持したり、強化したりすることができる。

3. 本研究の目的

上述したように、個人は自らの活動的原子価によって行動し、個人やグループとの関係を築いていく。Hafsi (2006a)は、その活動的原子価が、個人の物理的・社会的環境に関する考え方、人との接触の仕方、グループ活動のいろいろな側面における好き嫌いにも反映されるとしている。これについて、例えば船越 (2006)は、活動的原子価が友人選択にどう影響を及ぼすかを研究し、人は同じ原子価を持つ人間を友人として選択する機会が多いという結果を示した。

そこで、本研究では対人関係における心理的距離の取り方にも、個人の持つ原子価が影響するであろうと仮定し、以下の仮説のもと新しく対人心理距離を測定する尺度の作成を試みた。

本研究での基本的な仮説は以下の通りである。

- 1) 依存の原子価を持つ人 (以下、DVP) は、普遍的に他者との距離が近いであろう。
- 2) 闘争の原子価を持つ人 (以下、FVP) は、「気の合いそうにない人」は遠くに、「気の合いそうな人」は近くに置くだらう。

- 3) 逃避の原子価を持つ人（以下、FIVP）は、普遍的に他者との距離が遠いであろう。
- 4) つがいの原子価を持つ人（以下、PVP）は、「気の合いそうな人」や異性の人との距離が近いであろう。

Ⅱ. 尺度の作成

前述したように、これまでの心理的距離の研究では、気質など個人が持つ特性や親密度からみた距離感が主な研究対象であり、個人と他者とのつながりから見た対人心理距離についての研究は少ないといえる。そのため、対人交渉場面において一般的にある、二者間の打ち合わせという状況を設定し、ある部屋に配置された5つの座席のどこに自分と相手を座らせるか、という座席選択行動についての尺度を作成し、各個人の原子価がどのように反映されるかを検証しようと試みた。

1. 尺度の概要

1) Valency Assessment Test (VAT) (Hafsi, 2005)

まず、個人の原子価を測るため、VAT (Valency Assessment Test) という文章完成式のテストを使用する。このテストは、Stock & Thelen (1958) によって開発されたRGST (Reaction to Group Situation Test) に基づいて、Hafsi (1997) が改訂したRGST-Nu (Reaction to Group Situation Test~奈良大学版) をさらにHafsi (2005) が改訂したものである。このテストは、対人関係下において個人が他者に見せる反応パターンや、つながりの方法によって、各個人の最も優勢な原子価を測定するものである。質問の内容は、依存・闘争・つがい・逃避の4つの原子価、およびグループへの貢献度を測る協同指標 (Cooperation Index) に関するもので、各5項目合計25項目がランダムに配置されている。実施の際、25項目を約20秒間隔で検査者が読みあげ、対象には深く考えることなく、時間内での回答を求める。テストの所要時間は約15分である。

2) 対人心理距離尺度 (Hafsi & 別所, 2006)

次に本研究の目的である、対人心理距離を測るために、対人心理距離尺度を作成した。

- a. 尺度の作成：対人間の心理的距離を測る方法としては、天貝 (1996) が線分上に教師・友人・家族を示す印を書き込ませ、その間の距離を測定し、心理的距離とするという方法をとっている。また、美山 (2003) は天貝の方法を修正し、2本の線分上で、自分から相手までの距離と、相手が思っているであろう自分までの距離の2種類を示すことを求める方法を実施した。さらに板井 (2001) は看護学科の学生を対象として、中央に老人を表す簡単な絵が描かれたシートに、被験者が最適な距離と思われる場所にシールを貼り付ける方式の「老人に対する心理的距離テスト」を作成し実施した。本研究ではそれらを参考に、原子価の対人関係における特徴が、対人心理距離にどのように反映されるかを測定するため、以下のような図を用いて、ある条件下において、自分と他者の座席選択について問う、対人心理距離尺度を新しく作成した。

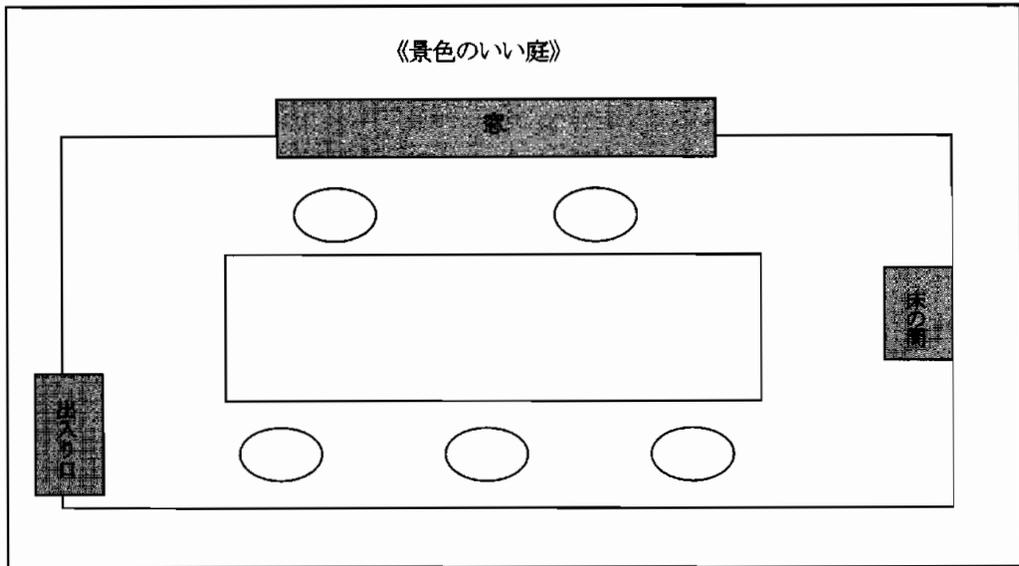


図 1

b. 尺度の形式：この対人心理距離尺度では、「あなたはゼミの飲み会の打ち合わせで、これからAさん、Bさん、Cさん、Dさんの4人の人に会うことになりました。」という教示の下、あらかじめ印刷されたある部屋における5つの座席に、まず自分の位置を決めさせ、そののちにA～Dの4人の人物の座る位置を記入させることとした。また、A～Dの4人の人物については、属性を以下のように設定した。

Aさん：気が合いそうにない人。

Bさん：気が合いそうな人。

Cさん：異性の人。

Dさん：初めて会った人。

同時に、それぞれについて、なぜその人物をそこに座らせたのかを自由に記述させることとした。

Ⅲ. まとめ

本論文は、自分と相手という二者間における対人心理距離を測る尺度を作成する過程について言及した。まず初めに心理的距離に関する先行研究を紹介し、次に尺度作成の際の理論的背景として、Bion (1961) とHafsi (1997, 2006) による、他者とつながるために個人が持つ特性としての、原子価の理論について記述し、原子価の類型に基づいた、個人の距離の取り方に関する仮説を提示した。しかしながら、今回作成した心理的距離尺度を実際に使用した上で、仮説を検討する必要がある、今後実際に対人心理距離尺度により、対人間の心理的距離を測定し、原子価との関係を明らかにしていきたい。

付記

本論文を作成するにあたり、いろいろとご指導をいただきました、奈良大学社会学部人間関係学科Med Hafsi教授に心より感謝いたします。また、本論文について貴重なアドバイスをいただいた、奈良大学研究生船越弘子氏、および本研究にご協力いただいた、奈良大学の学生の皆様に、末筆ながらお礼を申し述べさせていただきます。

参考文献

- Bion, W.R. (1961) *Experiences in groups and other papers*. New York:Basic Books. (池田数好/訳 (1973)「集団精神療法の基礎」岩崎学術出版社)
- Hafsi, M. (1997) VALENCY AND ITS MEASUREMENT:VALIDATING A JAPANESE VERSION OF THE REACTION TO GROUP SITUATION TEST (RGST). *Psychologia-An International Journal of Psychology in the Orient*, vol.XL, No.3, 152-162
- Hafsi, M. (2003)「ビオンへの道標」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2004)「「愚かさ」の精神分析 ビオンの観点からグループの無意識を見つめて」ナカニシヤ出版
- Hafsi, M. (2006a) The Chemistry of Interpersonal Attraction:Developing Further Bion's concept of "valency". 奈良大学紀要34, 87-112
- Hafsi, M. (2006b) 対象関係の病理学を理解する頂点としての『マイナス原子価』～あるマイナス依存原子価を持った男性の事例～ プシコフィリア研究 3, 3-15
- Hall, E.T (1966) *THE HIDDEN DIMENSION*. (日高敏隆・佐藤信行/共訳 (1970)「かくれた次元」みすず書房)
- Little, K.B. (1965) Personal Space. *Journal of Experimental Social Psychology* 1, 237-247
- Sommer, R. (1969) *Personal Space: The behavioral basis of design*. (穉山貞登/訳 (1972)「人間の空間デザインの行動的研究」鹿島出版会)
- Stock, D., & Thelen, H.A., (1958) *Emotional dynamics and group culture:Experimental studies and group behavior*. New York:New York University Press.
- 対人行動学会編 (1986)「対人行動の心理学」誠信書房
- 青野篤子 (1979) 対人距離に関する発達的研究 実験社会心理学研究 19(2), 97-105
- 天貝由美子 (1996) 中・高生における心理的距離と信頼感との関係 カウンセリング研究 29, 130-134
- 板井修一 (2001) 看護学生の老人に対する心理的距離 筑紫女学園大学紀要 13, 281-299
- 大森慈子・宮田洋 (1998) 面接者との距離が被面接者の瞬目と心拍に与える影響 心理学研究 69(5), 408-413
- 詫摩武俊・瀧本孝雄・鈴木乙史・松井豊共著 (1990)「性格心理学への招待〔改訂版〕 自分を知り他者を理解するために」サイエンス社
- 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁樹算男・立花政夫・箱田裕司編 (1999)「心理学辞典」有斐閣
- 船越弘子 (2006) あなたはどのような友人と付合っているか—友人選択における原子価の影響について— 奈良大学大学院研究年報 11, 45-54
- 美山理香 (2003) 大学生の友人との心理的距離に関する基礎的研究 九州大学心理学研究 4, 27-35
- 安永浩 (1992)「安永浩著作集3「方法論と臨床概念」」金剛出版
- 山口正二 (2004) 生徒と教師の心理的距離に関する実証的研究—最適な心理的距離・自己概念・学校適応か

- らの検討— カウンセリング研究 37(1), 8-14
- 山根一郎 (1995) 対人心理距離のモデル化 相山女学園大学研究論集 26 (社会科学篇), 1-13
- 山根一郎 (2005) 「私とあなたの心理的距離—その社会心理学から存在論へ—」 青山社
- 吉田富二雄・堀洋道 (1989) 仲間集団の存在および視線遮断がパーソナル・スペースに及ぼす効果 心理学研究 60(1), 53-56